Zoom in Human Security
人間の安全保障

「障害者を、弱者にしない社会へ」

障害者支援分野の事業を担当している木下真理子さんは、障害者自身に光が当てられることだけでなく、地域住民を巻き込んだ、社会の変革へのアプローチが大切だと訴える。

JICA人間開発部職員
木下 真理子
Kinoshita Mariko

社会が障害者を弱者にする

障害者支援というとよく「人間の安全保障」の視点に結び付けられます。人間の安全保障が社会的弱者を重視しているからだと思いますが、障害者＝社会的弱者と考えるのは、私は少し抵抗があります。障害者は必ずしも社会的弱者ではないし、障害者を弱者にしているのは障害ではなくむしろ社会のほうなんです。

研修で来日した障害を持つ研修員は「日本に来て自分は障害者ではなくなったように感じる」とよく言います。それは物理的にバリアフリー化が進んでいることも大きいですが、人々の態度の問題、例えば町の中では普通に車いすの方や目の不自由な方が生活しているのを目にすることができることなどが大きいと思います。しかし、途上国ではあからさまにじろじろ見られたり、学校に行けなかったり、家の恥だとして家族が外に出したがらないということがよくあります。そうした社会と闘ってきた障害者の人々が日本に来て、弱者と感じない社会も可能だと実感するのです。

社会を変えるといっても容易ではありません。物理的なバリア、教育や就労などを妨げる制度的なバリア、また意識や文化の問題もあります。例えば障害のある子どもが生まれると、その家が前世で悪いことをしたからだと見られることも少なくありません。また、障害者福祉は政府の中で優先順位が低く、なかなか取り組みが進みません。

そういう意味では、人間の安全保障のボトムアップの考え方はとても有効です。コミュニティーやNGOなど草の根の力を重視し、そこからアプローチすることで障害者を取り巻く社会を変えていく。例えばコミュニティーに対しては、住民の理解を促進し、障害者の存在を受け入れる村に変えていくような働きかけが重要です。近年、地域住民みんなで障害者を取り巻く課題を解決し、助け合って生きていく社会を目指すCBR（Community-Based Rehabilitation）の試みが進んでいます。

障害者の力が周囲を変える

障害者が自分にできることを周囲にアピールしていくことも大切です。タイの「アジア太平洋障害者センター（APCD）」では、途上国の障害者のエンパワーメントを図る研修を行っています。障害を持つ研修員が自分の力に気付き、自国でほかの障害者の意識を変えていくことを目指す研修（Peer Counseling）や、建築家と障害者が一緒にバリアフリー化を学ぶ研修もあります。建築家の考えるバリアフリーが実は障害者にとって使い勝手がよくないということは多いので、障害者の視点を加える重要性を経験してもらいます。日本の円借款で造られたタイの地下鉄は、その研修を受けた建築家によってバリアフリー化されたんですよ。

ボトムアップのアプローチにより、草の根から障害者支援のキーパーソンが生まれてきたとき、その活動を後押しし、拡大するためには政府の力も必要です。そうした両面からのアプローチをJICAが支援していければいいと思います。また、障害者支援を行う援助機関はまだ多くないので、JICAがほかのドナーに働きかけ、連携事業やネットワークづくりも進めたいですね。